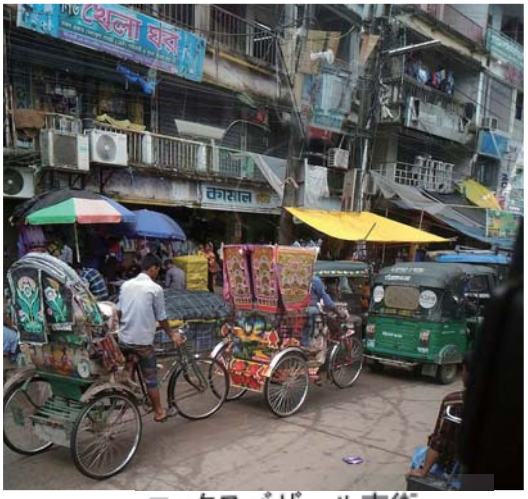
NPOアースキャラバン
バングラデシュ教育支援プロジェクト活動レポート
(2017.9.24実施)

NPO会員の皆さま及び里親の皆様、当プロジェクトにご理解、ご協力を頂きましてありがとうございます。心より感謝申し上げます。バングラデシュに於ける教育支援プロジェクトを視察する為、２０１７年９月２４日～３０日にかけて行って参りました。今回のレポートをお読み頂き、又一層のご理解、ご支援を頂けましたら幸いと存じます。
また、今回のレポートは新規里親さんのために若干細かい内容になっておりますが、通常のレポートではもう少し簡単なものになりますのでご了承下さい。

日本から飛行機をバンコク、ダッカ、チッタゴンと二度乗り継ぎ、さらに車で走ること５時間、現地拠点のコックスバザールに着いた時には出発から丸一日が過ぎていました。
宿泊先は現地スタッフのラジョーさんのお宅。日頃、支援先の村と連絡をとったり、状況を把握して日本側スタッフと連絡をとるなどコーディネーターとして奔走して下さっています。ラジョーさんご自身がラカイン族であり、日本への留学経験もあり、日本語、英語、ベンガル語（国語）が話せる大変に貴重な存在です。

早朝、モスクから聴こえる礼拝の合図を知らせる放送と野良犬の遠吠えで目が覚めます。バングラデシュ人口の約９割はイスラム教徒です。ひとたび外に出れば、オート三輪や自動車がクラクションをひっきりなしに鳴らしながら走り、その間を人力車、牛、ヤギ、野良犬、歩行者が所狭しと行き交うカオスが出現します。ここでは日本の四割の国土に１億６千万人が暮らしています。


コックスバザール市街

1. バングラデシュの教育とラカイン族の子どもたち

バングラデシュでは、公立の小学校（１ー４年）から中学校に進級する時に試験があります。多くの子どもは私塾に通って試験に備えますが、貧しい家庭の子どもの親は僅か500円でも授業料を払うのは難しく、おのずと進級にも支障をきたします。対象範囲が広いため、試験対策の学習がなければ合格が難しいそうです。

こうした状況のために、貧困家庭の子どもや孤児は進級できないことが多く、教育制度から早々にドロップアウトして将来的にまともな仕事に就けず、貧困の悪循環から抜けられないという問題があります。
また、仮に試験に合格して進学を果たしても、衣類・縫製、農業以外にまともな産業が育っていない国内事情に加えて人口過多のため、なかなか仕事にありつけないという事情があります。さらに支援対象であるラカイン族は仏教徒の少数民族（全人口の１％未満）なので、差別も追い打ちをかけています。

2. NPOアースキャラバンの教育支援

このような現地の状況を踏まえて、NPOアースキャラバンでは、ラカイン族の村の中から緊急度や立地条件を考慮して支援対象となった村々に対して学校や塾を設置し、進学に必要な基礎学力を向上させるための授業、補習を行っています。

バングラデシュ内でラカイン族の集落は全部で２４村あり、現在支援しているのは、その内の３村です。将来は出来るだけ多くの村への支援を心がけ、最低の義務教育さえ受けられないでいる貧しい子供達に、より多く教育の恩恵を受けられるようにしていきたいというのが私たちの望みです。

授業の科目は進級、就職に必要な科目である、ベンガル語、英語、数学そしてラカイン族の文化でもあるラカイン語の４教科です。現状はラカイン語を教えられる教師自体が少ないため、全村では教えられていませんが、早急に探しているところです。我々は虐げられがちな少数民族である彼らに独自の文化を守り伝え、誇りを持って欲しいという観点から、他の学校でもラカイン語の授業を取り入れるよう働きかけています。

３. 支援金の用途

皆様から頂いた支援金は以下の用途に使わせて頂いております。
毎月の文房具の支給（全生徒にノートとボールペン）、校舎の補修や備品の購入（本棚、机、スポーツ遊具他）、先生の給与、必要に応じて制服の製作費など。

他に、年一回のピクニック予算でもあれば、どんなにか子ども達の顔が笑顔になるでしょう。支援金の用途として、教育環境を最低限充実させてあげることはもちろん大切なのですが、「楽しいから行きたい」と思ってもらえるような学校運営をしたいと願っています。

通常は生徒間の不公平をなくす意味で特定の子どもに対する支援は行っていませんが、孤児の場合は、僅かばかり楽しみもあって欲しいとの想いで駄菓子を月に数個買えるばかりのサポートはしています。（小１～２年で150円、３～４年で300円、５年～中学で600円、専門学生で750円）また、孤児でなくても 、貧しさのあまり生活を支える為に学校に通えなくなる子供も多く、その子ども達への支援をどうしていくかも今後の検討課題だと思っています。

4. ヒアリングによる支援の検証と改善

NPOアースキャラバンの日本や海外の会員が年に一度現地を訪れ、現地スタッフ、僧侶、村長、教師や生徒達から支援の成果について話を聞き、ニーズについて話し合い、今後のより良い支援に結びつけています。

村の代表から、新しい里子や貧しさのため不登校になる子ども達への対応を依頼されることもあります。原則として、NPOアースキャラバンの支援方法は孤児たちへの個別サポートではなく、その子を通してその子の住む村をサポートしていますので、出来るだけ検討すると伝えています。

孤児と言っても施設で育つわけではなく、祖父母や親戚や村人が面倒を見て、互いに支え合って暮らしていますので完全に孤独になることは無いと聞いています。

４－１ ペクワ州バルバキア村

校舎

看板

コックスバザールから車で２時間のバルバキア村では、20人前後の子どもたちが学んでいます。学校では生徒たちの熱烈な歓迎を受けました。村長さんはじめ、生徒たち一人一人から花飾りと一緒に歓迎と支援への感謝の言葉を頂きました。
前回訪問時に依頼された制服が完成しており、お揃いの真新しい制服を着た子どもたちは誇らしげできらきら輝いて見えました。その後は子ども達一人ずつに文房具を手渡しました。

ヒアリングでは、村長さんから「支援を頂いてない時は村外のあちこちへバラバラに勉強に行っていたが、村の中に学校ができたことで村の子どもたちみんなで一緒に勉強ができるようになってよかった。お揃いの制服ができたことでよそからこの学校に来たがる子もいるほどで、子どもたちもやる気が出て来た。」とのお言葉。

若い二人の教師からは、楽しませながら学習意欲を引き出すために人形のようなものがあったらいいとか、備品の追加として机と椅子を増やすことが挙げられました。

私たちは、「最低限必要なものは用意したいが、ただお金や物を与えるのではなく、本当にあなたたちのためになる支援をしたい。私たちはあなたたちが学校を創造的に運営していく力を持っていると信じている。我々任せではなく、あなたたち自身がどうしたらより良くなるかを考えて積極的に取り組んでほしい。」と強調しました。

そして、子どもたちの教育についても「先生の指導に従う子を育てるのではなく、生徒の創造性を引き出すような教育をしてほしい。」と要望しました。

子どもの一人は英語が楽しいと言って、英語の作文を読み上げてくれました。外国人観光客の少ないバングラデシュでもNGO職員など外国人支援者が多数訪れます。英語を話せる人はまだ少ないので英会話は支援を受ける場合や就職にも有利です。「とにかく英語を話せるようにしてあげてほしい」ということも伝えました。
また、この村ではラカイン語の先生が未だいない為、ラカイン語の授業が受けられません。早急に先生を見つけて下さるように村長さんにお願いしました。

教師たち

村長さん

４−２ コックスバザール村

校舎

看板

ここでは２７人の子どもたちが学んでいます。他の二校（塾）とは異なり、進級試験前の４年生まではこの学校で週６日、朝９：３０から１５時頃まで公立学校のように授業をしています。上級生には塾として毎日４５分程度授業の復習をし、宿題も出しているとのこと。

教室

里親からの手紙を読み聞かせられる子

また、この村の学校の特色として代表が僧侶であること、ラカイン語の授業があることが挙げられます。ラカイン族の中でも現在はベンガル語が使われており、ラカイン語を話せる人は稀ですが、僧侶は仏典の勉強にラカイン語が必要なため、教えることができるのです

おしゃれな制服

僧侶と教師

ヒアリングでは、支援の成果として中学、高校、専門学校へ進級できる子が増えているそうです。ニーズとしては、「動物園に遠足に連れて行くための資金を提供してほしい。」、「夜間、校舎に人が入らないように柵を設置したい。」とのこと。
遠足予算の見積もりを出してもらうこと、校舎の柵はネット等で取り合えず代用してもらうようにお願いしました。

ヒアリング風景

4－3　コックスバザール チョフロン村

この村の学校では、２５人の子どもたちが学んでいます。教師はまだ１８歳の青年で１１歳の時に両親を亡くした孤児であり、英語が話せます。学校にある校舎は２００５年に国連の関係機関UNDPが建てたものですが、トタン屋根が壊れて修繕できていないため、寺院の敷地内で屋根の下に集まって勉強しています。

壊れた校舎

毎回訪れる度に校舎のトタン屋根の修理を依頼されますが、見積もって＄1500程の金額は即了承できないところです。これから冬を迎え、寒さの中での勉強は厳しさがありますので、屋根の修理も検討しています。
教師は支援の成果について、「ドロップアウトする生徒が少なくなり、進級しやすくなったことにやり甲斐を感じている」と言っていました。

教師

チョフロンの子どもたち

余談ですがこんなやりとりがあって笑ってしまいました。

我々：「どうすればもっと良くなると思いますか？」
教師：「もう一人教師として雇ってほしい」
我々：「どなたか推薦する方はいますか？」
教師：「その人を推薦します。」
我々：「彼女はどなたですか？」
教師：「…妻です。」
我々：「嫁さんか！！」

一同爆笑

我々：「結婚してたんですか？！」
教師：「はい。一月前に（照れ笑い）」
我々：（十代の新婚夫婦が教える学校…（笑））

さすがにすんなり了承はできませんが、両親を早く亡くした教師とその妻が教える学校も悪くないような気がしました。厳しい境遇の子どもたちに共感できやすいからです。まだ若いのでしばらく様子を見る必要がありそうですが...

５. まとめ

私たちの教育支援は電車の中吊りやネット上に広告を出す大手NGOが行うものに比べてごくささやかなものです。NPOアースキャラバンのスタッフは完全なボランティアで、それぞれが生業を別に持っています。そのため、手続きに時間がかかることもあり、日頃から申し訳なく思っています。

村の一部ではかつて大手NGOが教育支援を行っており、立派な校舎が建てられたところもあります。しかし、彼らの支援は数年間の期限付きで行われることが多く、成果や後の展開に関わらず、期限がくれば突然打ち切られてしまいます。その結果、与えられる物資、お金によって支援のある間はうまく事が運びますが、後は運営資金がないために傷んだ校舎が打ち捨てられ、元の状態に戻ってしまいます。

また、一方的に与えられることに慣れた被支援者は、生活を自分たちでより良いものにすることを忘れがちです。当事者の主体性、創造性を育むことでいつか支援者が安心して離れられるようにするには、根気やアイディアとともにまとまった時間が必要なのです。

私たちは「可哀想な人たちを助ける活動」をしているつもりはありません。途上国の貧しさは先進国側が搾取して豊かさを得ている経済の構造も一因となっています。公平、公正な経済活動が行われることを願う一方で、不公平な関係を少しでも補うような活動をすることが当たり前の世の中になってほしいと強く望みます。

何より私たちが支援者を増やそうとしているのは現地の人たちだけのためではありません。この支援活動にはおまけがついてきます。それは他者の苦しみ、痛みを我が事とする人間本

来の生き方、真の幸福へ至るための案内状のようなものです。この案内状を多くの人々に届けることで自由と幸福を地球全体でシェアする機運が高まることを願って止みません。

最後に、今回訪問して大きな気づきがあったことは、皆さまの支援金が確実にこの村で実を結んでいるという実感です。それは子ども達に笑顔と勉強の楽しさをもたらしているということです。教育レベルも上がりました。制服を着た子ども達はとても嬉しそうに自慢げな笑顔を見せてくれました。とても嬉しかったです。

又来年も、私達の心を和ませてくれる沢山の笑顔に会いに、長い旅をして会いに来るのだと思います。皆さまからの引き続きのご支援、ご理解、ご協力を心よりお願い申し上げます。

NPOアースキャラバン会員（菱倉卓也、遠藤磨祐記）